

に頼らねばならぬといった内容のものとなっている。観念的には、確率論と物理論の結合は可能と考えられるのであるが、数学に弱い筆者にとっては、この方法論的な問題が、この種の研究を行う上での第一の悩みとなっている。

山地、森林下での水や土の問題は、複雑ではあるが、少なくとも、我々にとっては、最も身近なフィールドでの事柄であり、これに関与する知見も、ある程度は、ととのっている現況下にあるとも考えられるのである。つまり、現状でも、適切にとりまとめを行えば、社会的にも役立ちうる数量的知見を提示しうる段階にあるのではないかと思われる。

方法論的な自信のなさを感じながらも、森林、林地の水土保持機能の定量化を目標にしているのが、私の最近の研究テーマである。

3. 林業・北と南

九大農 柿原道喜

北海道足寄での10年余の生活に別れを告げ、南国博多に帰って、早いもので8カ月になる。最初は、スギやヒノキの話聞いてもどうもピンとこず、これが北海道ボケというものであるかと思ったりもした。その後、山をみる機会にも恵まれ、だんだん山の様子もわかってきた。そこで、今日は、九州の山と北海道の山を比較しながら、これまでに得た感想を思いつくままに述べてみたい。

北海道の人はよくいう、「九州は林業の先進地で育林技術もすぐれている」と。確かに、新聞、雑誌などに紹介されている、スギ、ヒノキの立派な造林地と、野ねずみに喰われたカラマツ造林地、寒さの害のため2次林のようになってしまったトドマツ林とを対比するとそういうことになる。しかし、九州でも標高1,000 m以上にもなると、点々としか生えていない造林地があり、また、あきらかに生育不適地と思われるところに造林が行われたりしている。北海道の良い山と九州の悪い山を比較すると、北海道の方がはるかにすぐれており、北海道が九州にくらべ、特に劣っているということはない。

北海道のカラマツの造林地を眺めて思っていたことに、通直な木が少ないということがある。しかし、スギの造林地をみると、本当に通直なものは少なくカラマツとあまり変わらないということも気のついた点である。

次に間伐の問題にふれてみると、第1回目の間伐を有利に行う為に、最近、伐り捨て間伐の必要性が強調されている。筆者も、カラマツの伐り捨て間伐を試みようと思ひ、何度も現場まで行ったが、とても惜しくて伐る気がしなかった。スギ、ヒノキでは実行されているので、「さすがは違う」と感心したりもしていた。しかし、今回、実際に間伐されているところをみたが、伐られているのは、劣勢木、あるいは曲り木など、常識で考えて伐って惜しくないものが伐られている。これならやり易いと思ひ、できるのが当然という気がした。

北海道では、拡大造林時代に行った大面積造林に対する反省から、広葉樹の保残、育成、あるいは天然林施業などが盛んに論議されている。この点、九州ではどのようなになっているかも興味のあるところであった。まず、広葉樹については、いわゆる雑木山というのが多く、とても保残、育成という施業を行おうとする気がおこらない。もし、スギ、ヒノキの適地であれば造林した方がよいという気になる。北海道では、ミズナラ、ヤチダモなど大径木の立派な林があるが、こんなものは見当らないようである。北海道は広葉樹の宝庫だということをよく聞かされたが、本当だと痛感した。また、民有林では、2次林を残すとか、尾根筋を保残帯にするとといったことができないこともあるが、結果的に大面積の一斉造林地になっているところがあり、最近でもよくこんなことをしているなど感心したり、造林に対する考え方は案外北海道の方が進んでいるのかも知れないと思ったりもした。北海道で行っているいわゆる植込みというのもあまり行われてなく、生態学的な考え方を重視した森林の取扱いという面では、九州の方が劣っているようである。

数字で比べたわけではないが、北海道のカラマツ、トドマツ、広葉樹いずれもよい生長をしており、九州の山に比べても孫色はない。これは、土地生産力がすぐれているということであろう。また、北海道は地形がよく機械化林業も可能であり、木材生産という立場からみると、九州にくらべて、はるかに有利であるということもできる。

広々とした大地、澄みわたった青空、これは、北海道のもつ大きな財産であり、しかも、そこには、生産力に富む機械化林業の可能な林地が広大に広がっており、天然林施業に代表されるような、自然界の均衡を維持しながら木材生産を行う森林施業が行われ、また今後、積極的に取入れようという気運があらわれている。このようにみると、北海道の林業は前途洋々ということになる。北海道の林業界の人はもっと自信を持ってよいのではないか、そんな気がしてならない。

4. 空中写真の利用に対する一私見

九大農 長 正道

曾ては青松白砂を誇ったといわれる博多湾、その博多湾に面して静かな^{たす}行まいを貪っていたであろう福岡市も、時代の変遷と共に大きく変貌し現在にいたっている。博多を記した古文書に姿をみせる名勝・千代の松原や生の松原も、現在では九大のキャンパスおよび九大早良演習林の一隅等に侘びしくその面影を残すにとどまる。その博多湾にはいくつかの小河川が注ぎ込んでいる。その中に、ときとして歴史に名をあらわす多々良川がある。この多々良川は農学部の北側ほんの1 kmほどのところに河口を有するため、九大キャンパスの建物の屋上からも望見され、なにかにつけ九大とは因縁の深い川である。つい10数年以前までは、早春には白魚が上り、夏には川えびやどんこ、鮒の類いからハヤ、ボウ等が徘徊し、また秋にはハゼの群に太公望の釣竿の列が兩岸に連なっていたものである。